



TITLE:

ニホンザル野外観察施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

川村, 俊藏; 東, 滋; 渡辺, 邦夫; 足沢, 貞成

CITATION:

川村, 俊藏 ...[et al]. ニホンザル野外観察施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1984, 14: 26-28

ISSUE DATE:

1984-09-29

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163322>

RIGHT:

報告・その他

- 1) Nogami, Y. & M. Yoneda (1984): Patrones Estructurales del Esmalte en la Superfamilia Ceboidea, Kyoto University Overseas Research Reports of New World Monkeys, 4: 1-10.
- 2) 宮尾嶺雄・相見 満・西沢寿晃(1983): 動物遺存体, 栃原岩影遺跡発掘調査報告書(昭和58年度), 信州大学。
- 3) Setoguchi, T. & A. Cadena (1984): Relacion Entre la Morfologia y la Funcion de la Dentadura en la Lineje *Stirtonia-Alouatta* (Ceboidea), Kyoto University Overseas Research Reports of New World Monkeys, 4: 11-20.

学会発表

- 1) 江原昭善(1983): 人間にとって技術とは一進化史的観点から一。日本心理学会第47回大会, 社会・産業部門シンポジウム。
- 2) 江原昭善・遠藤萬里(1983): Cercopithecoideaの下顎体側面観の形態学的特徴。第37回日本人類学会。
- 3) Setoguchi, T. (1983): Some New Cebooids (Primates, Mammalia) from the La Venta Miocene of Colombia, South America, 43rd Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology, Laramie, Wyoming, USA.
- 4) 瀬戸口烈司(1983): リスザルとオマキザル一系統関係を中心にして一。第37回日本人類学会日本民族学会連合大会。
- 5) 野上裕生(1984): タマリンのエナメル質と広鼻猿類のある進化傾向。第28回プリマーテス研究会。
- 6) 瀬戸口烈司(1984): 古生物学証拠と分子時計の調和と不調和一南米ザル系統論の例から一。第28回プリマーテス研究会。
- 7) 相見 満(1984): リーフモンキーの分布の展開について。第28回プリマーテス研究会。
- 8) 遠藤萬里・高橋秀雄・足立和隆・江原昭善(1984): オナガザル上科における下顎体側面観輪郭形状分化の生体力学的分析, 第37回日本人類学会。
- 9) 中久喜正一・江原昭善(1984): 霊長類各分

類群の肝臓内血管分布と肝葉区分。第89回日本解剖学会。第28回プリマーテス研究会。

ニホンザル野外観察施設

川村俊蔵(施設長・兼)・東 滋・渡辺 邦夫・足沢貞成

本施設は幸島野外観察施設を改組拡充するというかたちで昭和53年度から新しく発足した。幸島のほかに、ニホンザルの分布北限である下北, 南限である屋久島, 中部日本の裏日本型気候の上信越, 表日本型の木曽の4つの研究林地域をあわせて, 5つのニホンザルの代表的な生息地について研究保護区としての維持をはかり, 長期的に安定した条件下で, ニホンザルの研究を展開することを目的としている。

昭和58年度の各フィールドステーション関係の活動状況は次のとおりである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以來の蓄積された資料をもとに野外観察施設の中では独自の位置を占めている。今年度は岩本俊孝(宮崎大)による採食生態, 樋口義治(愛知大)による野外でのオペラント学習実験, 井上美智子(大阪市大)による音声の分析等の研究が行われた。また特定研究「生物の適応戦略」の一環として, イモ洗い等の文化的行動の解析(河合雅雄, 渡辺, 樋口)や, 第3者による争いへの介入, 援護といった利他行動の実態(渡辺), 出産と食物量の関係(森明雄), 等の研究が行われている。今年度訪れた研究者は延270人日であり, その他大学, 報道機関等の関係者は延100人日以上になる。59年8月の時点での島内の個体数はマキ・グループ12頭を含め92頭であり, この10年間ほとんど変動していない。〔今年度中の出産は8例, うち5頭が死亡した。〕

2. 下北研究林

1983年度の積雪期の調査は足沢, 綿貫(北大・農, 共同研究員), 中山(北大農), が中心となり北大農・同ヒグマ研究グループの学生諸氏, 地元のあしの会(代表, 森治)の先生方, 京大, 野生研の研究者などの参加をえて12月20日から4月15日にわたって行われた。M群を115日間(うち113日間は連続追跡)観察したほか, 新しく発見されたM群の分裂群A r a グループを28日間平

赤座久明, 岩川 正, 宮川猛史, 藤田 剛,
大井 徹(1984):「屋久島原生自然環境保
全地域調査報告書」

学会発表

- 1) Azuma, S.: Ecological biogeography of Japanese monkeys (*Macaca fuscata*) Sino-Japanese Joint Mammalogical Symposium, Hefei, Anhui, China. (1983).
- 2) 東 滋, 大竹 勝, 山極寿一, 足沢貞成, 赤座久明, 宮川 猛, 藤田 剛, 岩川 正, 大井 徹: 花山原生自然環境保全地域に生息するヤクザルの生態について。第28回プリマテス研究会。(1984).

サル類保健飼育管理施設

竹中 修(兼)・松林清明・後藤俊二・鈴木樹理・松林伸子¹⁾

昭和55年度から開始した繁殖コロニーにおける飼育, および飼育技術員の担当個所の固定化と, 人工授精, 人口哺育, 室内計画繁殖等の飼育関連技術のレベルアップ, さらに細菌, 血液, 寄生虫, 病理等の各種検査を基礎とした保健・診療関係の整備について今年度もそれなりの進展を見たと言える。例えば, 人工授精によるチンパンジー2子の出産はすでに報告したが, 今年度においても「チンパンジーの聴覚と音声の発達」の研究のため人工授精によるチンパンジーの新生児(♀, 名前はパン)を供給した。

当施設の教官が主体となった共同利用研究会「霊長類研究への実験動物学的アプローチ」が11月末に開催された。今年度の副題は「霊長類と疾病」であった。所外からの25名を含む約40名の参加を見, 霊長類と疾患との関わりについて第一線で仕事をしている人達により活発な討論がなされた。

人事では昭和58年6月1日付で助教授昇任により空席となった助手を公募により求めたところ, 東京大学農学系研究科の大学院生であった鈴木樹理に決定した。また昭和45年以来飼育はもとより施設の機械, 設備の整備に尽力のあった加藤良夫技官

が11月1日付で名古屋工業大学に転出した。また昭和59年4月1日から2年間, 竹中 修(生化学部門)が施設長を兼任することとなった。

研究概要

- 1) 雄ニホンザル性機能の年令・季節変化の研究

松林清明

各性ホルモン濃度や下垂体組織の変化を調べると共に, 精液性状, 生殖腺組織像の発達と季節変動をみている。

- 2) 飼育下のサル類の疾患に関する調査研究

松林清明

全国の動物園, 日本モンキーセンター, 霊長類研究所の診療簿, 剖検録等の記録から, 種, 年令, 性, 飼育形態による疾患傾向の有無を調べている。

- 3) マカク類の成長に伴う眼内視所見の推移

後藤俊二

単色光撮影法を応用して眼底各層の加齢による形態変化および屈折率の変化等について調べている。

- 4) ニホンザル四肢奇形の原因探究

後藤俊二

催奇形因子を類推する手がかりを得ることを目的として奇形固体および奇形出産個体の血液性状について検討を行った。

- 5) サル類の成長の形態学的および生理学的研究

鈴木樹理

各種サル類の成長を, 初期成長および性成熟過程に重点をおいて, 生体計測ならびに各種ホルモンなどの測定により解析する。現在カニクイザルについて研究を行っている。

- 6) サル類疾病の病理学的研究

鈴木樹理

本研究所で死亡したサルについて病理学的検索(特に組織学的検索)を行い, その原因とサル類における各種疾病の病理形態の解明を進めている。

論文

- 1) Matsubayashi, K. and T. Enomoto (1983) ; Longitudinal studies on annual changes in plasma testosterone, body weight and spermatogenesis of adult Japanese monkey (*Macaca fuscata*) under the labora-

1) 教務職員